

### 日本版刊行にあたって

これまで、聴覚や視覚、触覚、味覚、嗅覚等、感覚の問題を客観的に把握することは難しいと考えられてきました。また、感覚過敏が原因で日常生活において著しい困難が生じていたとしても、周囲には気づかれないこともありました。しかし、最新の診断基準（DSM-5）において、自閉スペクトラム症の診断基準に、新たに感覚過敏性などの感覚異常が加えられ、そうした感覚異常を客観的に把握できるようにすることの必要性が明確になってきました。

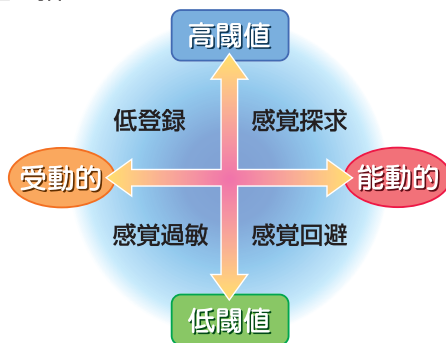
感覚プロフィールは自閉スペクトラム症を中心とする発達障害の人たちの感覚特性を客観的に把握するために欧米ではよく使われている尺度であり、今般その日本版が刊行されました。この検査は、SP感覚プロフィール（保護者記入）、ITSP乳幼児感覚プロフィール（保護者記入）、AASP青年・成人感覚プロフィール（自己記入）からなっており、非常に簡便に、短時間で実施できるのが特徴です。原版開発者のDr. Winnie Dunnが提唱する感覚刺激への反応傾向を4つの象限（低登録・感覚探求・感覚過敏・感覚回避）でとらえていく考え方は、感覚の問題に困る多くの発達障害等の人たちへの重要な支援の視点を提供しました。今まで「どうしようもない」と思われていた感覚の問題を、本人や家族、支援者が具体的に把握できるという点で、感覚プロフィールは革新的な役割を果たしています。早期に感覚異常を把握することは、子育ての上でも青年期以降の生活適応を考える上でも、とても重要なのです。

感覚の問題に困っている多くの発達障害等の人たちの感覚傾向を把握し、その支援策を考えていく上で、感覚プロフィールの情報が有効に活用されることを願っています。

日本版監修 辻井 正次

### Dunnの4象限モデル

評価対象者がどのように感覚情報を処理するかを、神経学的閾値（高閾値～低閾値）と行動反応・自己調節（受動的～能動的）の相互作用によって説明している。なお、閾値とは神経の反応に必要な刺激の量を指す。



高閾値：刺激に気づきにくい

低閾値：刺激に気づきやすい

受動的：閾値に従って反応する

能動的：閾値に反して反応する

**低登録（高閾値＋受動的）**：多くの刺激がないと神経が反応しないため、刺激に気づきにくく、無関心・無気力のように見える傾向がある。

**感覚探求（高閾値＋能動的）**：感覚入力を増やそうとする傾向がある。作業中に頻繁に動いたり物をさわったりするような行動が見られ、興奮しやすいように見える。

**感覚過敏（低閾値＋受動的）**：必要以上の刺激に気づいてしまう。注意散漫な傾向があり、多動となることもある。新しく現れた刺激に注意を向ける傾向があり、課題遂行が滞ってしまう場合がある。

**感覚回避（低閾値＋能動的）**：刺激に圧倒され、刺激を避けるための能動的行動が見られる。破壊的行動をとることがある。日常生活の中で起こる変化を、なじみのない刺激の攻撃ととらえ、抵抗を示す。

## 使用の実際

### 福祉

これまでの研究から、自閉スペクトラム症をはじめとする発達障害のある人たちの問題行動と感覚処理特性には関係があることが指摘されています。感覚処理特性に対するアプローチが、生活適応問題の解決につながることも少なくありません。つまり、個別の支援計画を立案する際に感覚処理面のアセスメントは、ライフステージを通して重要となります。また、感覚プロファイルによって、問題行動の背景にある感覚処理特性をとらえやすくなります。これは、これまでのアセスメントにおける解釈により多くの情報を提供することを意味します。特別な支援を要する人たちが安定して生活できるような環境づくりにも、感覚プロファイルの結果を加えたアセスメントが役立つでしょう。

### 医療

2013年に改訂されたアメリカの「精神疾患の診断・統計マニュアル第5版（DSM-5）」では、自閉スペクトラム症の診断基準の中の1つの項目として感覚処理の問題が挙げられています。感覚プロファイルは、DSM-5の自閉スペクトラム症の診断項目に挙げられている「感覚刺激に対する過敏さまたは鈍感さ、または環境の感覚的側面に対する並外れた興味」を「低登録」「感覚探求」「感覚過敏」「感覚回避」の4象限によって評定できるため、診断の一助となり得るでしょう。

感覚処理の問題は、発達障害がある人やその家族の生活を困難にする原因となっていることもあります。そのような問題への医療的アドバイスに、感覚プロファイルによる情報が役立つでしょう。

### 教育

教育環境において、子どもたちの感覚処理特性が適応に影響を与えていることは指摘されていますが、それを教師が把握することは簡単ではありません。授業中の集中の難しさ、落ち着きがない行動、友達とのトラブルの多さ、情動の不安定さなどが感覚処理の問題と関係していることがあります。感覚プロファイルによって、支援および指導計画を立てる際に、子どもの感覚処理特性による問題や適応に関するヒントなどを明確に示唆することができます。子どもが楽しく通学し、効果的に学習できる環境づくりのためには、個人の感覚処理特性を考慮した合理的配慮が必要です。感覚プロファイルの実施と解釈は、これらの問題解決に関わる支援機関の連携の媒体となるでしょう。

### 研究

感覚処理をテーマとする国際的な研究論文の多くは、感覚プロファイルを評価ツールとして採用しています。これまでITSP乳幼児感覚プロファイル、SP感覚プロファイル、AASP青年・成人感覚プロファイル、SP感覚プロファイル短縮版のいずれも研究に用いられています。近年増加している自閉スペクトラム症の感覚処理の問題に関する研究において、感覚プロファイルの結果は不可欠なデータと言えるでしょう。感覚プロファイルの信頼性、妥当性は確立されており、感覚処理のアセスメントツールの国際的スタンダードとして用いられているため、国内外で発表するいずれの研究にも用いることができます。